序

中川成美先生には、二〇一七年三月をもって定年の期を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生の積年のご功績を称え、深い感謝の意を表すため、ここに退職記念の論集を編んで献呈させていただくこととしました。

先生は、一九七五年に立教大学文学部日本文学科をご卒業後、同年、立教大学大学院文学研究科修士課程日本文学専攻に進学され、一九八四年には同研究科博士課程を単位取得満期退学されました。その間、数多くの教育機関などで教育・研究に従事された後、一九八七年より同志社女子大学短期大学部に着任され、一九九五年には立命館大学文学部日本文学専攻助教授として移籍し、翌年には教授に昇任されました。そして、二〇一〇年三月には、『モダニティの想像力―文学と視覚性』（新曜社）を以って、立教大学より博士（文学）の学位を取得されました。

先生は、研究業績一覧でもうかがわれるように、長年、近代日本文学分野の研究に精力的に取り組んでこられました。主たる研究分野は、日本近代文学におけるモダニティをめぐる諸問題やジェンダー・スタディーズ、20世紀日本人の海外体験など多岐にわたっておられます。とりわけ、日本近代にあつてモダニティはいかなる問題を提示したのかについて、日本近代文学が残した膨大なテキストから精緻に検討し、近代日本が構築した制度のジェンダー、国民国家などの多面的な領域からの読み替えを主要テーマとされてきました。また先生は、ご共著 *Return to Japan* (Aarhus University Press, 2001) にみられるように、ご自身の研究活動を国外にも広められ、世界的視野から近代日本文学・文化批評にも力を注がれました。例えば、米国のカリフォルニア大学ロサンゼルス校日本研究センターでの招聘講演（二〇〇八年十月）など、海外での活躍により Nakagawa Shigemi の名はよく知られるようになり、毎年のように海外からの留学生が先生の指導を受けるべく文学研究科の門をたたくようになりました。

学界活動においては、立命館大学日本文学会、日本近代文学会、日本比較文学会、国際比較文学会、アメリカ日本文学会、ヨーロッパ日本学会、国際文学博物館会議などを拠点に幅広く活躍されるとともに、国内外の大学院生など若手研究者の指導や育成にも注力されるなど、先生の研究と教育の両面からのご尽力に対しては高く評価されているところです。

一方、先生は『京都新聞』（朝刊・全26回 二〇〇八年四月二十七日～十一月二十五日）に「忘れられた物語」と題する読者を魅了するエッセイを連載されるなど、新たな京都文化の発見や発掘、情報発信に尽力されてきました。また、「大阪・京都文化講座 京都・大阪街歩きー文学・芸術・映画の舞台を仮想探訪する」（本学大阪梅田キャンパス、二〇一四年十一月、大阪大学・21世紀懐徳堂との共催）での「川端康成の関西ー故郷と異郷」と題する講演や、「国民国家と多文化社会」（国際言語文化研究所二〇〇八年秋季企画連続講座「格差拡大社会とグローバルリズム」第19回シリーズ）でのディスカッションなどの諸活動を通して、日本および文学という領域を超えた、現代の社会や芸術文化への新たな創造に向けた提言をされました。

そして、中川先生は教育・研究のみならず大学行政にも尽力され、数度にわたる日本文学専攻の主任をはじめ、文学部副学部長および文学研究科長、さらには立命館大学国際言語文化研究所長など数多くの要職を歴任され、学部・大学院・全学の発展に貢献されてきました。先生の厚いご経験と高い見識が、いかに高く評価されてきたかがうかがわれるところです。

文学部教授会は、永年のご貢献に謝意を表するため、来る四月一日付で先生に名誉教授の称号をお贈りするよう手続きを進めているところです。今後とも、わたくしども後進を見守り、文学部および文学研究科の教学発展のため、ご助言を賜うることができますれば幸いです。

二〇一七年二月二十五日

立命館大学人文学会会長

文学部長 藤 卷 正 己